

学生が語る「何をしたいのかわからない」 —発達障害学生の語りと学内連携の観点—

The students said “they don’t know what to do”.

村中 泰子（神戸大学 キャンパスライフ支援センター 特命准教授）

要旨

学生との面談の中で「何をしたいのかわからない」という意図での「死にたい」という言葉をよく聞く。橋本・富永（2014）によれば、心の相談の場においても悩みを上手く表現できず、「死にたい」「(学校を) やめたい」という表現を使う学生が増えている。本稿では相談上で「死にたい」という表現を用いた発達障害の学生の3事例を取り上げ、背後にあるサインを検討すると同時にその後の学内での連携について考えていくことを目的とした。事例から見られた共通点は、「何をしたいのかわからない」という意図が発言の背後にあったことである。その後の対応で必要なことは、本人の死についての意図に関わらず、本人が取れる行動の選択肢を増やし問題解決を図ることである。その際には学内の資源を有効に使い、複数で学生を支援する必要性がある。また、当該学生の情報を専門部署に報告するだけでなく、協働して学生をサポートすることが重要であることが示唆された。

1. 問題と目的

2017年の秋に座間9遺体事件が発覚した。この事件は、SNSで「一緒に死のう」と自殺志願者を誘導し殺害、遺体を切断するという傷ましいものであった。社会的なインパクトは大きく、事件発覚後数週間で、再発防止のためにSNSの中で自殺を助長する書き込みの規制強化が閣僚会議で話し合われているのも一つの現われだろう。また、事件を受け、米ツイッター社の日本法人は自殺の助長・煽動禁止をルールに追加した。一方でこれらの規制に対して、「安心して本音を言える場がなくなる」「規制ではなく安心して『死にたい』をいえる場こそが自死の防止になる」など否定的な意見もある（松本, 2017）。

SNSでつぶやかれる「死にたい」には、「課題が大変で死にたい」「仕事で嫌なことがあった、死にたい」のように希死念慮とは異なる性質のものから、「死んでしまいたい」のように、より希死念慮に近いものまで多様である。また、実際の心の相談の現場では、希死念慮とは画して、学生相談室のカウンセラーに対し悩みを上手く表現できず「死にたい」「(学校を) やめたい」という表現を使用する学生が増えている（橋本・富永, 2014）。

本稿では、教員が通常の指導の場と同様にメンタル面でのサポートを中心にいない障害学生部門という限られた場において、学生から「死にたい」という言葉を聞いたとき、その発言の扱いと意図を考察していきたい。なお、希死念慮ではなく、「何をしたい

のかわからない」という SOS サインとして考えられる事例を取り上げ、その後の学内での連携について考えていくことを目的とする。

2. 障害学生の支援体制について

神戸大学では、2015年12月1日に障害学生に対して修学支援を行う専門部門として「キャンパスライフ支援センター」が設立された。設立の趣旨は、全学的立場から、神戸大学における障害のある学生の修学等支援の推進及び協働体制の構築を図り、合理的配慮に基づく修学機会を提供することである（神戸大学, 2015）。

キャンパスライフ支援センターは主に障害のある学生に対して、修学に係る全般的なアドバイスを行う部門であり、学生が所属する部局と協働して支援を行っている。2016年4月から障害者差別解消法が施行され、それにより国立大学法人では、障害のある学生に対して合理的配慮の提供が義務として課せられるようになった。主にキャンパスライフ支援センターでは、合理的配慮の提供に対し、その支援の妥当性を部局と共に考える立場にあるといえる。

神戸大学で定められた障害を理由とする差別の解消の推進に関する職員対応要領（神戸大学, 2016）にあるように、非常勤の教職員を含む大学の構成員全てがその義務を負っていることになり、合理的配慮を提供する主体は障害学生支援部門ではなく、当該学生が所属する部局および大学の構成員である教職員であることに留意する必要がある。

3. 障害学生部門（キャンパスライフ支援センター）の中での相談業務

神戸大学の障害学生部門（キャンパスライフ支援センター）の中での相談業務の内容の主なものとして想定されているのは、障害等の合理的配慮となる根拠のアセスメントや必要性、また障害からくる日々の修学上の困難についての相談である。ここで、環境等のアセスメントや修学上の困難をアセスメントする相談業務に関して障害学生支援部門が担当することは異論がほとんどみられない。対して、精神障害や発達障害の学生に対して相談を行う際、修学相談とカウンセリングとの線引きが難しいケースもある。日本学生相談学会（2015）によれば、発達障害学生の対応する部門においては、コーディネート機能とカウンセリング機能の両機能を持つことが理想としているが、障害学生部門において、両機能を持っている大学は少なく、マンパワーに余裕がなければ困難である。そのため、障害学生支援部門の方針やカウンセリングに割けるマンパワーに応じてその機能を特化させている大学もある。

学生が障害学生支援部門へ来談する理由の多くは、指導教員等や職員に相談したときに勧められたからというものである。神戸大学のキャンパスライフ支援センター（障害学生の修学上の支援部門）では、定期的にメンタル面での相談が主となる場合は、キャンパスライフ支援センターから保健管理センターのこころの相談を紹介している。キャンパスラ

ライフ支援センターにおいて相談を継続して行う場合は、焦点をメンタル面ではなく修学上のスキル面や行動面に当てる場合に限っている。例えば「レポートを期日までに仕上げられない」という事象に対して、メンタル面の不調を主に考えなければいけない状態であると判断した場合には、保健管理センターの精神科医に引継ぎを依頼するが、レポートを完成させるという目的に対してプランニングがうまくできないことが原因と判断した場合には、計画の立て方に困難があると考えて、そのスキルを向上させるための相談をキャンパスライフ支援センターで行う。

前述したキャンパスライフ支援センターの設立趣旨の特性上、生命の危険にあると判断される状態にある学生を適切に対応できる組織ではない。また、修学支援等の相談を行うスペースは、当事者にとって安全な空間と判断できる場ではないこと（完全な個室ではなく、他者の出入りがある場所）から、カウンセリング機能は基本的には持っていないと言える。

4. 死にたいという言葉の意味

学生と修学相談を行う中で、「死にたい」という言葉を時折耳にする。その意味が本来の辞書的な「死」を望む状態にあることと判断すべきか、ネガティブ語の一つとしての表現と考えるのが適切なのか、言葉のインパクトと安全管理の観点からも適切な対応に悩むことが多い。松本（2016）によれば、自殺念慮（「死にたい」）を抱いたことのある者の25%が実際に自殺企図におよんだ経験があり、「死にたい」は将来における自殺リスクと密接に関連しているという。具体的に修学支援を考える場において、「死にたい」という発言は、背後にどのような意図があるのか、メンタル面でのサポートを中心においていない障害学生部門という限られた場において、その発言をどのように扱い、どのような意図があるのかを一考していきたい。

以下の事例は筆者が経験した相談の中で「死にたい」（またはそれに類するもの）と語った学生の事例である。その中から事例の共通点および学内における連携を考えていく。なお、個人の特定を避けるため、本質に影響のない範囲で改変した。また、事例の学生はASDやADHD等の診断がついているが、本稿の目的では診断名に重点を置いておらず、また一般の認知度の高さから、「発達障害」という語を用いた。

5. 事例

○ 卒業と就職がうまくいかないことを主訴にしたAさん

Aさん（発達障害、4年生以上、文系学部）

主訴 就職活動がうまくいかない。やる気がでない。卒業できないかもしれない。

初回の相談時は卒業論文の指導年度の夏休みであった。①就職活動がうまくいかないこ

とと、②必修単位を複数回チャレンジしているが単位取得できないこと、③卒論ゼミや授業には、時間をうっかり忘れて欠席してしまうことが問題としてあげられた。

学内の連携と支援部門の関わり：

①に関しては、キャリアセンターへ就職活動のサポートを依頼した。その際にAさんの特徴と就職活動を遂行する上での考えられる困難をアセスメントし、キャリアセンターと情報共有を行い、同時にAさんとは自分にあったキャリアセンターの利用法に関して戦略を練った。Aさんは「障害に関して上手く説明できない。」「エントリーシートが書けなくて、1回行ったけれど、それ以降行けない。」というように学内資源を有効に活用できていない問題も持っていたことがわかった。②および③に関しては、卒論担当教員と連絡をとり、Aさんが抱えている困難の説明と、卒業が可能になる具体的なプランを指導教員と話し合い、Aさんと共有した。

相談の中での「死にたい」：

相談を通じて、Aさんは朝早くから登校しているが、趣味に没頭し、大学に居ながら授業に出席をするのを忘れてしまうことがわかった。Aさんは優先順位を考える際に、「趣味の時間が第一であり」、「趣味を楽しむことを親に禁じられているため、大学内でしかできない。」「趣味ができないなら、『死にたい』と頭を抱えながら語った。

「死にたい」の意味：

Aさんの中には、趣味の時間を取るかまたは取らないかのイチゼロ思考が強固に存在していた。その中間の選択肢を提案すると同時に、“〇〇ができないならば「死にたい」”ほど、その趣味が好きであるという言葉の読み替えを行い対応した。Aさんとの会話の中で、やや大げさに表現する特徴は、周囲を巻き込み、慌てさせるよう作用し、Aさん自身もその表現や言葉に結果的に縛られて、選択肢を狭めるような思考に陥ってしまうというパターンも見えた。

キャンパスライフ支援センターでの修学支援に関する面接の中では、文脈の中での意味を一般的な言葉に置き換えつつ、Aさんの困り感の本質を明確化し、その解決に向けて本人ができることを単純化することで時間管理をAさんが無理せずに行えるようになった。

○ 大学生全般が怖く、卒業論文ゼミに参加できないことを主訴にしたBさん

Bさん（発達障害、4年生以上、文系学部）

主訴 卒論ゼミに参加することが怖い。親の名誉のために大学に通っているので卒業するつもりがない。

Bさんは、卒業研究指導の合理的配慮を受けるために部局からの紹介でキャンパスライフ支援センターを利用した。気分の浮き沈みが周期的にあり、精神科医の定期的なサポート（服薬なし）も併用し、修学支援のサポートを行った。

学内の連携と支援部門の関わり：

①合理的配慮の調整を部局と連携して行い、Bさんの卒業論文指導を個別のゼミで行うことにし、欠席が続いた場合やゼミでの様子について、学内メール等で部局内のキーパーソンおよびキャンパスライフ支援センターに情報が共有された。また、②キャンパスライフ支援センターでは、卒論ゼミでの本人の取り組みや授業の出席を本人と月に1回程度確認するために面談を行っていた。その際、気分の落ち込みが大きい場合には、保健管理センターの精神科医と情報を共有し、本人と精神科医との定期面談以外の予約を取った。

相談の中での「死にたい」：

周囲から“卒業後の進路”の話題が持ち出されたことを契機に気分の落ち込みが激しくなり、予約外にキャンパスライフ支援センターに来ることが増えた。また、将来の選択肢の中で「障害者」の枠での就職活動を周囲に勧められたことも一つのきっかけになった。Bさん自身は、「自分は障害者ではない。卒業するつもりはないし、卒業したら親の思う壺であり、卒業の日に「死ぬつもり」であること」を沈黙の後、語った。

「死にたい」への対応：

大学生でなくなることと「死」との関係を話し合った。Bさんの表現する「死ぬつもり」はBさんの文脈の中でどのように機能しているのかを面談を通じてアセスメントを行った。大学生でなくなることは、親からの仕送りの終了を意味しており、生活するには働くまたは実家に戻らなければならない。親との関係は良好とは言えず、自活する道を模索しているが、コミュニケーションが苦手な部活でもアルバイトでも失敗している。Bさんはアルバイトもできない自分が就職活動を行うことは無理であると思っていることがわかった。「人と話すことができない自分は就職できない。実家にも戻りたくなく、行き場所がなく困っている。また生活できない。」これらのことが、「死ぬしかない」の背後にあった。もし、コミュニケーションを練習する場があれば、「死ぬしかない」以外の選択肢あるのではないかと質問した際に、Bさんは「そんなところがあるかどうかわからないけど、そうです。」と答えた。

○ 予約外に混乱して来室するCさん

Cさん（発達障害、4年生以上、理系学部）

主訴 就職活動がうまくいかない。

①夏休み時点で多数の企業から不採用通知を受け取っており、②必修単位は就職活動と両立するには困難な単位数を残していた。

学内の連携と支援部門の関わり：

①に関して、キャリアセンターへ就職活動のサポートを依頼した。その際にCさんの特徴と就職活動を遂行する上での考えられる困難をアセスメントし、情報共有を行った。②

に関しては、卒論担当教員と連絡をとり、Cさんが抱えている困難の説明と、卒業が可能になる具体的なプランを指導教員と話し合った。

表1. 3事例のまとめ

	初回来談の 時期	学生生活上の 困難	学内での連携先	「死にたい」表現の意図
Aさん	4年生以上	・就職活動がうまくいかない。 ・卒業に必要な単位を取れない。	・キャリアセンター ・卒論指導教員	・非常に好きなことがあることの別表現。 ・解決方法がわからないで困っている。
Bさん	4年生以上	・同世代と話せない ・卒論ゼミに出席できない。	・卒論指導教員 ・所属学科のキーパーソン(所属長/教務委員等) ・保健管理センター	・コミュニケーションができないことで働けないので困っている。 ・解決方法がわからないで困っている。
Cさん	4年生以上	・就職活動がうまくいかない。	・キャリアセンター ・卒論指導教員	・解決方法がわからないで困っている。

相談の中での「死にたい」:

予約外での来室時または急な電話の際には必ず「死にたい」という発言が出現した。混乱した様子で前後を話さずに「大学を辞める」「死ぬしかない」と話を切り出す特徴があった。

「死にたい」への対応:

落ち着く時間を取りつつ話を聴いていくと、Cさんが解決できないことまたは物事が思い通りに進まないため「大学を辞める」、「しかし大学を辞めても自活する方法がない」、「それならば、死ぬしかない」という思考パターンがあることが分かった。大学を辞めたいわけではないが、自分で解決できないことが生じているので、大学を辞めると、一時的に解決する。しかし、もし実際退学してもすることがわからないので、「それならば、死ぬしかない」という考えに至っている。思考パターンを変え、考え方を柔軟にするために定期的な面談をするよう調整するが、Cさんとは調子が上向きなときには自己判断で予約した時間に来ない。そのため、定期的な面談をすることが困難であった。Cさんが来室するとき

は、何かトラブルが生じたときであり、面談のたびに「大学を辞める」「死ぬしかない」という発言がみられた。そのため、なぜCさんは「大学を辞める」必要があり、「死ぬしかない」という結論に至るのかをエピソードごとに一緒に整理する必要があった。今現在できることおよび中期的（1～2 か月）に行うことを行動レベルで単純化することで落ち着きを取り戻し、「大学を今辞めるのはもったいないですね」と自ら話していた。

6. 考察

本稿では、学生から語られる SOS の表現とその意味およびその後の学内の連携を考えていくことであった。事例の共通点を整理し、連携を考えていくにあたって、自殺予防のモデルに倣って、対応を考えていく。

【時期について】

面談の場での希死念慮とは異なる「死にたい」を考える上で、上記の3事例を紹介した。これらの事例の共通点は“就職”を意識した最終学年であることである。いずれの例も、多少無理をすれば卒業単位を取得できるが、就職活動と同時に行う場合には容易ではない単位数を残していた。

障害学生が高等教育機関に進学する割合が増加し、障害種の中でも精神障害や発達障害は4割超を占めている（日本学生支援機構，2017）。また、2018年度から企業における障害者の雇用の法定雇用率が引き上げられること、また法定雇用率に精神障害および発達障害の労働者が算定されることによって、精神障害や発達障害の雇用が増加する要因は多くある。しかし一方で障害者の採用の現実は、「車椅子」等を利用する身体の障害のある学生の雇用を多く求め、発達障害や精神障害の雇用に消極的であり、そのことは就職相談会において企業担当者に筆者が直接相談した結果からも伺われる。

また、障害のある学生のキャリア支援は早期から開始する必要があると言われているが、実際に未診断またはグレーゾーンの発達障害の学生は、医療機関につながるまでの時間が長く、また診断を受けても本人の障害の受容に至るまでの時間を多く必要とする。特に受動的に大学の授業を受ける際には問題がないケースに至っては、障害受容がより困難である。また、就職活動で難航した際に「障害者雇用」の枠で就職するときの心理的壁の厚さも他の障害の学生に比べて大きいように感じる（事例Bさん）。

「就職活動」は大学生活全体の中で比重が大きく、それを見越した単位取得計画は当たり前のようにならされており、大学生活後半の大きなイベントであるといっても過言ではないだろう。障害者差別解消法が施行されて以降、大学生活をおくる上での合理的配慮について焦点を当てられており、高大連携という観点は整いつつある状態といえよう。しかし、大学を卒業し、次のステージに移行するにあたってのサポートは少なく、障害学生のサポート希求力の弱さが要因となって対応が遅れる傾向がある。時には卒業間際または他の学生の就職活動の終了間際の時期に駆け込むケースもある。

キャリア形成に関する教育は障害のある学生に関しては早期に行う重要性が言われているが、発達障害の場合、本人の障害受容がなされていない例や就職活動を通じて自分の持っている特性に気づく例も少なくなく、結果的に将来に対しての準備が不十分なことが多い。発達障害の一つの特性の中のプランニング能力の弱さや想像力の欠如等が、授業と就職活動の両立や社会に出て働くことの意味を理解することの妨げになり、就職活動に対する準備が遅れることが多く、他の学生よりも、焦りやどうしていいのかわからない状態に陥りやすく、それが結果として、大学を卒業した後のライフステージに対する不安を強めていると考えられる。

【修学支援の枠組みで有効なモデル】

斎藤 (2015) は、大学のキャンパスの中で自殺のハイリスク学生に介入するモデルとして、リハネンの DBT モデル (弁証法的行動療法モデル) をベースとした介入が有用であることを私見として述べている。DBT モデルのエッセンスを応用した場合、自殺以外に選択肢がないという心理状態を脱することを取りあえずの目標とし、本人を中心とした大学関係者等とのネットワークづくりを行うことを次の目標としている。以下では、この DBT モデルのエッセンスに沿った検討を行う。

【選択肢を増やすこと】

事例では、面談を通じて丁寧に文脈をたどっていくと自殺念慮の「死にたい」というよりは、「何をしたいのかわからない」という言葉に置き換えると整理がつくケースであった。しかし、「死にたい」という発言が将来の自殺企図の可能性を高める因子であり (松本、2016)、SNS 上の希死念慮とは異なる「死にたい」というネガティブ語は周囲にも影響を与える可能性がある (大家・宮下、2012) ことから、本人が本当に思っているかどうかを問わず、「死ぬ」以外の選択肢を増やし、問題解決の糸口を探る必要がある。事例では「何をしたいのかわからない」状態から、選択肢を増やし、「死にたい」の優先順位を下げ、他の選択肢を選択しやすいように状況を整理することが、面接の中では効果的に機能し、本人が問題解決的行動を取れるようになった。また、本人とは、面談の最後に、今困っている状況をキーパーソン等に (本人が話してもよいと思う人に) キャンパスライフ支援センターから伝えることの同意をとる。これは、困っている事象に対する解決を、当該学生本人のみが抱えるのではなく、他の人と共有することで解決方法が増えることを本人に伝える意図がある。また、「死にたい」という言葉がさらにエスカレートし、実行可能性が高まるような精神状態に陥っていないかを複数の視点で見てもらうためでもある。

【連携体制の構築】

学生と接する学内の教職員にとって、学生が「死にたい」と語る場面に出くわす可能性は今後も多くある。専門家につなぐことも大切なことの一つであるが、つなぐと同時に、その学生を取り巻くネットワークの輪の中に入ることが効果的な予防になると考える。また、「死にたい」「やめたい」は、苦境を説明できない一つの表現であり (橋本・富永、

2012)、背後にある意味を明確化した後にその困難が大学の中にあるならば、連携して対応することで、初めて解決に向かうだろう。

事例の中で、選択肢を増やす際には、大学内の一つの部局の機能だけでは解決に至らないケースが多く、AさんやCさんならば、就職関連のサポートをしてもらえる部署、また3例ともに共通するのは、卒業に関する単位の相談であるから、卒論等の指導教員や単位の状況をトレースしやすい教務学生係等の学科・学部事務との連携は欠かすことができない。また、Bさんは、同世代とのコミュニケーションスキルを練習するために、比較的同世代の利用者が多い外部の就労移行支援施設と連携をとった。

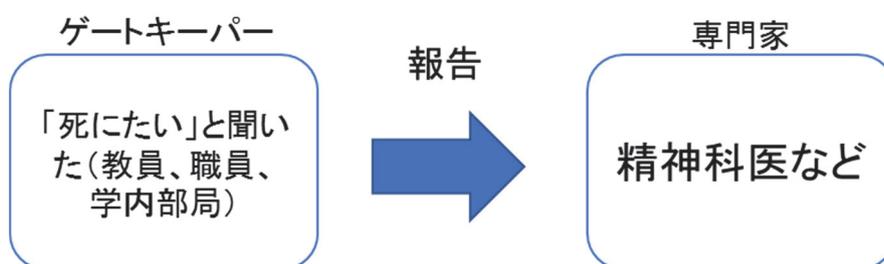


図1. ゲートキーパー対策から考えるゲートキーパーの役割

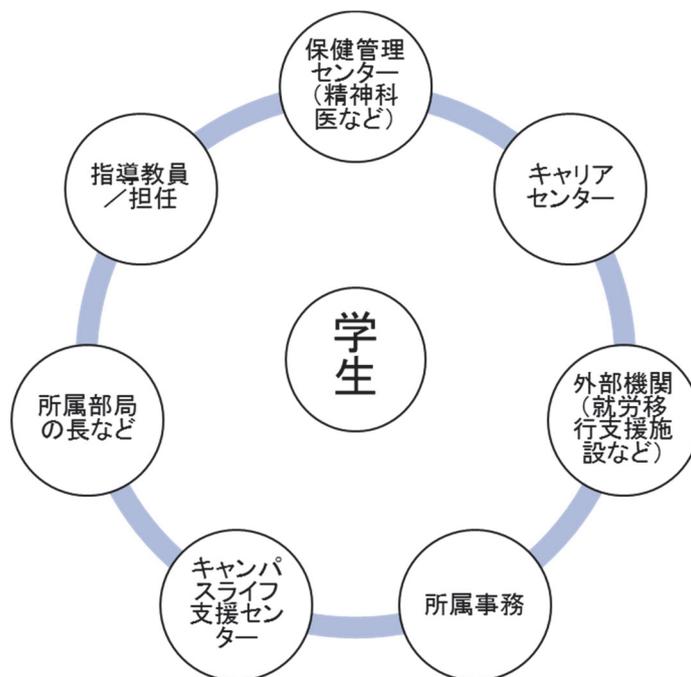


図2. DBL モデルから考えられる学生を取り巻くネットワーク

自殺予防に関して、各自治体でも採用されているゲートキーパー対策がある。ゲートキーパーとは、自殺予防についての正しい知識を持ち、身近な人の変化に気づき、自殺を考えている人、悩んでいる人の話を聴き、適切な相談窓口等へつなぎ、見守っていく役割が期待される人のことを指す(福島,2013)。大学のキャンパスにおいてゲートキーパーになりうる人材は、教員や、学生と接する機会が多い事務職員等である。ゲートキーパーの役割を忠実に守るとすると、学生の話聞き、保健管理センター等(または外部の医療機関)につなぐことが期待されるが、専門家につなぐことが、実は最も困難なことのひとつである。また、斎藤(2015)が指摘するように、専門家(精神科医等)につなぐことのみでは自殺の抑止にならない可能性もある。また、地域の中のゲートキーパーと異なり、大学の中では、ゲートキーパーになりうる人材が単に専門機関に連絡する人(図1)ではなく、その後、当該学生のネットワークの中でキーパーソンにもなる必要がある。専門家への連絡だけでなく、専門家からの依頼を受けて、当該学生がそのコミュニティの中で機能できるよう配慮を行う現場としての役割(図2)も担わなければならない。

障害学生支援部門(図2中、キャンパスライフ支援センター)の強みは、当該学生に直接アプローチすることも可能であると同時に、学内資源に働きかけ、学生を取り巻くネットワーク(図2)を構築していく過程で学生を間接的にサポートできることにある。ネットワークを構築する発端が、学生から相談を受けて問題解決する場合もあるが、本人が困難に気づいていない場合や周囲が当該学生との関わりで困難を生じている場合は、ゲートキーパー(図2における学生以外の役割)が主導してネットワークを構築することが必要になる。障害学生支援部門はネットワーク構築の際にはゲートキーパーをバックアップする役割も担うことが可能であると考えられる。

7. 結語

自殺の予防には「死にたい」と安心して言える場があることが大切(松本, 2017)であり、決して、死にたいという言葉の否定ではなく、背後にあるメッセージや他の選択肢を共に探る作業というものが必要と考えられる。死にたいという希死念慮ではないネガティブ語としての表現に潜む、学生の悩みを丁寧に話していく必要がある。また、学生が陥っている「何をしたいのかわからない(から死にたい)」状態から選択肢を具体的に示す途上で、学生の悩みの情報を共有し、学内連携のネットワークの中で有機的に機能できる連携先が明確になると考える。今後、学生を支援していく中で「何をしたいのかわからない」から学生の困難を汲み取り、学内の連携のネットワークに円滑に乗せていきたいと考える。

参考文献

- 大家 眸美・宮下 芳明(2012)「ウェブコンテンツにおけるネガティブ感情表現の緩和手法」
情報処理学会『ヒューマンコンピュータインタラクション (HCI)』12 号、pp.1-7.
- 斎藤 清二 (2015)「富山大学自殺防止対策システムの構築と評価 : 自殺関連行動への介入事例の質的分析を中心に」 富山大学保健管理センター『学園の臨床研究』14 号、pp.5-12.
- 橋本 景子・富永 玲子 (2014)「保健室・カウンセリング室を訪れる学生の姿からその役割について考える」 高田短期大学『高田短期大学紀要』32 号、pp.7-14.
- 福島 喜代子 (2013)『自殺危機にある人への初期介入の実際 : 自殺予防の「ゲートキーパー」のスキルと養成』 明石書店
- 松本 俊彦 (2016)「「死にたい」の理解と対応 (「死にたい」に現場で向き合う)」『こころの科学』186 号、pp.10-16, 日本評論社
- 神戸大学 (2015)「神戸大学キャンパスライフ支援センター規則」
<http://www.office.kobe-u.ac.jp/plan-rules/act/frame/frame110000687.htm>
(最終アクセス : 2017 年 11 月 23 日)
- 神戸大学 (2016)「障害を理由とする差別の解消の推進に関する職員対応要領」
<http://www.kobe-u.ac.jp/documents/info/project/elimination/outline.pdf>
(最終アクセス : 2017 年 11 月 23 日)
- 日本学生支援機構 (2017)「平成 28 年度 (2016 年度) 障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書」
http://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/_icsFiles/afieldfile/2017/11/09/2016report3.pdf (最終アクセス : 2018 年 2 月 7 日)
- 日本学生相談学会 (2015)「発達障害学生の理解と対応について 学生相談からの提言」
<http://www.gakuseisodan.com/wp-content/uploads/public/Proposal-20150425.pdf> (最終アクセス : 2017 年 11 月 15 日)
- 松本 俊彦 (2017)「座間市 9 遺体事件 : もし SNS で「死にたい」を見つけたら…精神科医が語る、みんなにできること」
https://www.buzzfeed.com/jp/satoruishido/toshihiko-matsumoto?utm_term=.sf5vZ2wwX#.pwYDpWyyd (最終アクセス : 2017 年 11 月 15 日)